

木野彩子

KINNO Saiko

クマ ま

2024年

1月5日「金」19時

1月6日「土」14時

とりぎん文化会館小ホール



しづやしづ

しづのまたまま

ふりま

八りにし

とろま

2024年1月5日 [金] 19時開演
6日 [土] 14時開演 (開場は15分前)

場所：とりぎん文化会館小ホール
(〒680-0017 鳥取市尚徳町101-5)

予約及び問い合わせ：kinokoticket@gmail.com

料金：大人2800円、学生※1 1000円、未就学児無料※2

※1：高校生以上は学生証を提示してください。要予約。
※2：未就学児でも座席を利用する場合にはチケットが必要になりますので、予約をお願いします。

構成・出演：木野彩子
音楽：八木美知依 (箏、21弦箏、17弦箏、voc)
照明デザイン・オペレート：三浦あさ子

舞台監督：田中陽一郎 (アドセンターフジ)
音響：加藤由布 (鳥取大学地域学部4年)
照明アシスタント：田中哲哉
企画協力：NPO法人ダンスアーカイヴ構想
チラシデザイン：北風総貴 (ヤング荘)

主催：鳥取大学地域学部舞踊研究室、キノコノキカク
後援：鳥取大学地域学部附属芸術文化センター
助成：令和5年度鳥取大学地域連携エクステンション活動、
Towson University Asian Arts and Culture Center
本公演は2023年Towson University Asian Arts and Culture Centerの招聘により
おこなった『SHIZUKA』アメリカ公演を鳥取にて改訂再演するものです。

CGRE 地域価値創造研究教育機構
Platform for Community-based Research and Education

静

アメリカ公演のレビュー
「静」は息をのむほど素晴らしかった。(中略) 私はパフォーマンスの間、ずつと息を止めていたかもしれない。(中略) 木野のゆつくりとした身のこなしは、まるで虚空から溶け出すかのような。頭上にはほんのわずかな明るさの光が照らされ、舞台は無限の空虚に包まれ、木野はその中に飲み込まれ、自ら作り出しているように感じられた。

木野彩子
ダンサー、振付家。北海道札幌市出身。横浜ソロデュオコンペティション2003で横浜市文化振興財団賞を受賞後、2004年文化庁在外研修で渡仏、ダンサー、振付家としてイギリスで活動したのち、2016年より鳥取大学地域学部附属芸術文化センターに所属。現在、舞踊の靈性について調査研究を行いながら、教職と舞踊家の二足のわらじを履く。生きることが全てダンスとなりつつある最近。
https://saikokino.jimdoofree.com

八木美知依 (箏、21弦箏、17弦箏、voc)
邦楽はもちろん、前衛ジャズや現代音楽からロックやポップスまで幅広く活動するハイパー箏奏者。自己のグループを率いるかたわら、浜崎あゆみ、柴咲コウらJ-POPアーティストのレコーディングやステージにも参加。ラヴィ・シャンカール、パコ・デ・ルシアらと共に英国のワールドミュージック誌「Songlines」の《世界の最も優れた演奏家50人》に選ばれている。ドイツのケルン・ジャズウィーク2023にて“Featured Artist”、オーストリアのジャズフェスティバル・ザールフェルデン2023にて“Artist in Residence”。
https://michiyoyagi.com

三浦あさ子
森下真樹、松本雄吉、ビジュ・克蘭チュンなど多くの振付家・演出家の舞台作品の照明デザインに20年以上携わる。2002年より、ダンスボックス (神戸) の照明チームを務める。2010年から木野作品の照明に継続的に関わっており、「かめりあ」横浜公演 (2010年)、「静」横浜公演 (2012年~2014年)、「死者の書再読」豊岡・鳥取公演 (2018年) などを手がける。

これまでの『静』公演の軌跡

これまで少しずつ進化、変更を加えて上演を繰り返してきました。
2010年 ギャラリー招山 (神奈川県鎌倉市、七里ヶ浜) 主催のパフォーマンス『響庭』として八木美知依、michi (映像) とのコラボレーションを制作。
2012年 『しづ』(文化庁新進芸術家海外派遣研修員による現代舞踊公演、KAAT 神奈川芸術劇場、20分)
2014年 『静』(TPAM ショークース、BankART Studio NYK 3C ギャラリー 45分)
『静』(BankART café live、BankART Studio NYK 2B ギャラリー 45分)
2023年 『Shizuka』(Kinetic Crossings アメリカボルティモア市 Theater Project 45分)
この作品の変遷の詳細については地域学論集 第20巻第1号 (2023) に記載しています。(鳥取大学リポジトリをご覧ください。)



Photo: Sakae Oguma



Photo: Bill Gorman

静とは？

『静』は、白拍子であった舞踊家・静御前を題材にコンテンポラリーダンスと音楽、照明とのコラボレーション作品である。白拍子は、一二世紀から一三世紀にかけて活躍した職業舞踊家で、水干に烏帽子をつけるいわゆる男装の女性として知られる。將軍や公家の寵愛を受けることもあり、静御前は源義経の愛妾として歴史や文学作品の題材として扱われている。(『平家物語』や『義経記』、能・歌舞伎・文楽の『二人静』『船弁慶』『義経千本桜』など) また、祈祷を起源とする即興の歌謡朗読(今様)の名手であったと伝えられている。
気の強い静は源頼朝に捉えられたのちも以下のように唄い、義経への愛を貫いたことで知られる。

しづやしづしづのをだまきくり返し昔を今になすよしもがな
吉野山峰の白雪踏み分けて入りにし人のあとぞ恋しき

一方でこのことが頼朝の怒りを買ひ、義経との間の子供を殺され、失意のうちに亡くなったとされるが、詳細は不明。京丹後市など全国各地に伝説が残されている。

本作品は5つのシーンで構成されている。あくまでコンテンポラリーダンスとしての解釈及び振付に基づくもので、白拍子舞の厳密な再現ではないが、「今様の書」など文献を参照している。

- 日常
- 死からの覚醒
- 祈り(春日若宮おん祭における巫女舞を元に)
- 水晶の夢
- 白い布(道成寺※の伝説にちなむ)

※「道成寺縁起絵巻」の安珍と清姫の物語に由来する。能『道成寺』には乱拍子と呼ばれる緊迫したダンスと音楽のセッションのようなシーンがあり、現代風に解釈を行っている。安珍に裏切られた清姫は徐々に狂っていき、白い蛇に変身し、最終的に道成寺の鐘に隠れた安珍を焼き尽くしてしまう。歌舞伎や能における『道成寺』はその後日談を題材にしている。



Photo: Kazuyuki Matsumoto